

Program Notes

E.グリーク (1843-1907)

ホルベアの時代から Op.40

「音楽においてもっとも重要なのは、情感の真実さである」と語るグリークの音楽の魅力は、何よりそのメロディの美しさにあるといえよう。大指揮者ハンス・フォン・ビューローが「北欧のショパン」と呼んだように、ピアノの作曲技法とその叙情的な作風に、特に優れた資質が表れている。弦楽合奏曲として今日広く親しまれているこの「ホルベアの時代から」も、もともとはピアノ曲として書かれたものである。

タイトルのホルベアとは、ルトヴィ・ホルベア男爵 (1664-1754) のことで、グリークの生まれ故郷であるノルウェーのベルゲンに生まれ、デンマークで活躍して「デンマークのモリエール」と賞賛された人物。この作品は1884年にそのホルベア男爵の生誕200年祭が行われた際、ピアノ組曲として作曲されたのだった。ホルベア男爵が生きた時代への憧憬からか、全5曲は典雅なバロック調のスタイルでまとめてられており、そこにグリーク特有の情緒が加えられて、凛とした魅力を放っている。ピアノ曲作曲の翌年、グリークはこれを弦楽合奏用に編曲した。

第1曲「前奏曲」アレグロ・ヴィヴァーチェは、トッカータ風の快活な一曲。

第2曲「サラバンド」アンダンテは、北欧の情緒が美しい。

第3曲「ガヴォットとミュゼット」アレグレット — ポコ・ピウ・モッソは、軽快なガヴォットにミュゼットが挿まれる。

第4曲「アリア」アンダンテ・レジーオーソは、悲しげな情緒が比類なき美しさを醸し出す一曲。

第5曲「リゴードン」アレグロ・コン・ブリオは、軽妙な主部にセンチメンタルな情感の中間部を配したコントラストが効果を上げる。

G.カッチーニ (1545-1618)

アヴェ・マリア

イタリア古典歌曲の名歌「アマリリ・麗し」の作曲者として名高いジュリオ・カッチーニ作として近年ポピュラーになった一曲だが、実際は旧ソ連の音楽家V.ヴァヴァイロフが作曲した曲であることが判明している。憂愁をたたえたメロディが多くのソプラノ歌手に愛唱され、様々な編曲でも親しまれている。

柿沼 唯 (作曲家) Yui Kakinuma

W.A.モーツァルト (1756-1791)

アダージョ K.261

モーツァルトの音楽の澄み切った美しさが際立つこの曲は、ヴァイオリン協奏曲第5番K.219の緩徐楽章として作曲されたというのが定説となっている。ザルツブルク宮廷楽団の楽長A.ブルネッティがこの協奏曲を演奏するにあたり、モーツァルトは別稿としてこの緩徐楽章を急遽作曲したのだという。いずれも穏やかな2つの主題が登場するソナタ形式で構成され、ごく短い展開部では一抹の憂愁を帯びた楽想が詩情を添える。

アレルヤ (モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」 K.165より)

モーツァルトは、親しい歌手のために多くの演奏会用アリアを書いた。モテット「踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ」は、1772年にオペラ『ルーチョ・シッラ』上演のために訪れたミラノで、このオペラに出演したカストラート歌手、ラウツィーニのために書かれた。当時イタリアでは、このような世俗的な教会音楽が盛んに演奏されていたというが、歌手の華やかな技量を発揮させるその音楽は、さながら声の協奏曲といえるだろう。今回ヴァイオリンで演奏される「アレルヤ」はその第3楽章。コロラトゥーラの名品として名高い一曲であり、原曲では「アレルヤ」の一語により明るく軽やかに歌われる。

J.S. バッハ (1685-1750)

2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV1043

バッハの現存する3曲のヴァイオリン協奏曲は、ヴァイオリンならではの技巧と表現力を発揮させた傑作として、いずれも広く愛好されている。バッハのケーテン宮廷楽長時代 (1717～23) の作品であるこれら3曲は、同地のすぐれたヴァイオリニスト、シュピースの演奏に刺激されて書かれたものと伝えられる。「2つのヴァイオリンのための協奏曲」は、バッハならではの精緻な対位法書法が光る作品。全く対等な2つのヴァイオリンが、互いに模倣しながら腕を競うように進められる。また第2楽章は、バッハの最も美しい緩徐楽章として名高い。

第1楽章ヴィヴァーチェは、フーガ風の導入に始まり、2つの独奏ヴァイオリンの多彩な模倣が展開されてゆく。

第2楽章ラルゴ・マ・ノン・タントは、平行調のへ長調に転じ、通奏低音の落ち着いたリズムに支えられて高貴な歌を奏でる。

第3楽章アレグロは、切迫したカノン書法が緊張感を生み、独奏と総奏が渾然一体となって音楽を進める。

Program Notes

A. ヴィヴァルディ (1678-1741)

ヴァイオリン協奏曲集「四季」 Op.8-1~4

ヴェネツィアの身よりのない少女たちの養護施設で音楽教師を務め、赤毛の司祭とあだ名されたアントニオ・ヴィヴァルディは、作品のほとんどをその少女たちが演奏する目的で作曲した。450曲とも550曲とも言われるそのおびただしい作品のほとんどは、様々な楽器のための協奏曲で占められている。これらは当時のヨーロッパで一世を風靡し、そのスタイルは「ヴィヴァルディ・タイプ」の名で、多くの聴衆のみならず、作曲家にも多大な影響を与えた。中でも、バッハがヴィヴァルディの作品を熱心に研究し、その協奏曲をチェンバロやオルガン用に編曲したことはよく知られている。

今日最もポピュラーなヴィヴァルディの作品「四季」は、1725年に出版された彼の5番目の協奏曲集「和声と創意への試み」の第1曲から第4曲に収められた4曲の協奏曲で構成される。いわゆる「標題音楽」の代表例として広く知られる作品であり、各曲には、「春」「夏」「秋」「冬」の標題とともに、四季の自然と人々の営みを歌った作者不詳のソネットが添えられ、音楽はその詩の情景にあわせて進められる。以下は詩の大意。

第1番「春」ホ長調

第1楽章：アレグロ 「春がやってきた。小鳥たちは嬉しそうに歌い、小川はそよ風にやさしく囁きながら流れる。やがて空が暗くなり、嵐がおそうが、それが静まると小鳥たちは再び嬉しそうに歌い出す。」

第2楽章：ラルゴ 「花ざかりの牧場では木々の葉がざわめき、羊飼いは番犬を側に眠っている。」

第3楽章：＜田園舞曲＞アレグロ 「ニンフと羊飼いはミュゼット(牧笛)の陽気な調べに合わせて踊る。」

第2番「夏」ト短調

第1楽章：アレグロ・ノン・モルト 「太陽が灼けつくきびしい季節になると、人や動物は元気をなくし、松の木さえも暑い。カッコウが鳴き始め、山鳩やひわも歌い出す。突然の北風。羊飼いは嘆いている。」

第2楽章：アダージョ 「はげしい稲妻や雷鳴におびやかされて、羊飼いは疲れた体を休めることもできない。」

第3楽章：プレスト 「稲妻、雷鳴、そして霰まで降ってきて、熟した果実をみんな地面に叩き落とした。」

第3番「秋」ヘ長調

第1楽章：アレグロ 「村人たちは歌や踊りで豊作を祝い、酒を飲み、眠りこむまで楽しむ。」

第2楽章：アダージョ 「皆が歌や踊りをやめたあとには、秋の穏やかな空気が、すべての者を甘い眠りへと誘う。」

第3楽章：アレグロ 「夜明けになると狩人たちは猟銃と角笛を持ち、犬を連れて狩に出かける。鉄砲と犬の吠え声が獣を追いつめる。」

第4番「冬」ヘ短調

第1楽章：アレグロ・ノン・モルト 「冷たい雪の中の凍てつく寒さ、吹きすさぶ寒風に、足踏みしながら寒さに菌の根が合わない。」

第2楽章：ラルゴ 「炉端では静かに満ち足りているが、戸外は冷たい雨が降っている。」

第3楽章：アレグロ 「氷の上を注意深く歩いて行く。乱暴に歩いて転ぶと、今度は急いで立ち上がり走り出す。南風、北風、あらゆる風が戦っているのを聞く。これが冬なのだ。しかし冬は喜びをもたらす。」